

第 39 回全国中体連バスケットボール大会出場を果たして

札幌市立清田中学校

女子バスケットボール部

顧問 秋田谷 正史

はじめに実に多くの方々のお力のお陰で私達が全国大会の場に立てたことを感謝の気持ちを添えて申し上げたいと思います。私達だけの力では決して全国大会には行けませんでした。ミニバスの指導者の方々のかめ細やかなご指導にはじまり、保護者の方の精力的なご支援、多くの方々による練習会や大会における実技指導やご助言、札幌や北海道のしのぎを削りながら切磋琢磨した数々のチーム。それらがすべて選手達の血や肉になりました。何もしなかったのが、コーチの立場にあった私でした。

それだけにチームを客観的に見ることができました。特に接戦の時(大会を勝ちあがるにつれ、そういう試合が続きましたが)にも、冷静に試合を受け止められました。

私が選手に指示することはひとつです。「あたりまえのことをしなさい。」という言葉です。自分達のやれること、それは多くの指導者が今まで彼女達に伝えてくださっています。つまり、やるべきことを普通にやればまず、負けることはないというというイメージを常に私は持っていました。ですから、序盤 10 点ほどリードされていても、どのチームに対しても最終的に 50 点を取れるというプランが立っていましたので、まず彼女達に伝えることはシュートまでプレーをすることと、相手に簡単な点数を与えないこと、つまり、リバウンドとルーズボールを頑張ることを言いました。それだけで徐々に自分達に波がきました。これも、大学生やクラブチーム、高校生と数多くのゲームをやり、もまれた成果だと思います。たいてい相手が後半、失速し、選手達は淡々と自分達のゲーム運びをしました。

普段の清田中の練習は特段、目新しいものはないと思います。もっと合理的で、最新の情報をベースにバランスの良い練習をしているチームはたくさんあるでしょう。皆さん、ご存知のようにこのチームは 3P で得点を重ねるスタイルでした。ですが、たくさんの方々から「確かに 3P は入るけど、撃つタイミングが違うよね。」というご指摘を受けました。実は私もそう思っていました、なかなかスペースを意識したパスゲームをさせられませんでした。

そのうち、「ああ、この子達は不器用なんだ。あまり考えると動けなくなるんだ。」とい

う結論に至り、「小うるさいことを言わずに好きにやらせた方がいいかも。」という心境になりました。

ですが、ここで私も改めて勉強させられたことがあります。中学生であれば(器用なタイプなら色々やれるのでしょくけど)、多くを欲張らず、最小限のことをとことん磨いてあげた方が苦しい場面で迷わないのではないか、ということです。

たとえば、全国大会の強豪チームのオフェンスは、そのほとんどが 1on1 の応酬です。中にはムチャ攻めと思えるようなプレーもありますが、そこだけを取り上げれば「してはいけないプレー」かもしれません、そういうプレースタイルが土壇場のスーパープレーにつながったりします。であるならばその 1on1 はゲーム全体の中では「すべきプレー」と言えるかもしれません。清田の選手達にとっては、3P がそれに相当していたように思います。全道大会の決勝戦の 4Q の同点 3P も、普通なら色々なプレッシャーを感じるのですが、実は一番自分達らしいプレーだったと言えるかもしれません。

全国大会は鹿児島ということで一番留意したことは暑さ対策でした。ところが、実際に「猛暑」を体験したのはバスを降りてから体育館へ移動する数百メートルだけでした。乗り物、宿舎、体育館全てが冷房完備で、実は快適でした。そういうこともあり「北国のハンディキャップ」はなかったのですが、予選リーグの 2 試合(尼崎中央中、柏崎第三中)はいずれもスコア上では 6 点差、5 点差の敗戦でした。この予選リーグについては頑張れた、という想いと相反する悔いが同居するのですが、敗因ははっきりしています。指導者である私が十分に選手達のモチベーションを高められなかったという、その事実につきます。全国出場が決まってから、私も選手も一種の安堵感に包まれて、その後の具体的な目標設定ができませんでした。多くの方々から全国対策として「リバウンドとルーズボール」というアドバイスを受け、私もそう思っていたので、そのための練習をしたのですが、いまひとつ、生徒達の中でそのプレーをゲームの場面にリンクさせることが難しかったようです。そういう場面でこそ、指導者の手腕が問われるところなのですが、そのあたりの「イメージ化」をさせられませんでした。自分の未熟さを再認識させられた場面です。大変、申し訳なく思っています。

最後に、ジュニア連盟の皆さんにお礼を。

今回、たまたま縁があつて私はこのような全国大会に出られるチームの指揮を執ることになりました。そして、様々な場面で貴重な経験をさせていただきました。

新人戦南北海道大会、決戦大会、北海道カップなど。特に北海道カップに参加させていただいたことは言い表すことが難しいほどの貴重な体験でした。藤浪中のスピード、八王子第一の無駄を省いたプレースタイルを目の当たりにできたことはかけがえのない財産となりました。桐山先生(八王子第一)や鷺野先生(藤浪中)とゲームの前後にお話をさせていただいたことも、その後の清田中の方向性を明確なものにしました。他の競技で、このような取り組みをしているところはあるのでしょうか。大勢の方々のご尽力の結晶が、これらの大会運営につながっていることを思えば、北海道のバスケットボールに対する情熱と懐の深さをあらためて実感させられます。そのような場に自分がいられたことに深く感謝申し上げます。

北海道ジュニアバスケットボール連盟の会長というご要職に就かれながら連日連夜バスケットボールのご指導にあたられている幸丸先生を筆頭に、創成高校の三上先生、練習会だけでなく全国大会にも応援に来ていただいた厚別北中学校の高橋和也先生、練習会で多くのアドバイスを頂戴した諸先生、大会期間中に激励の言葉を頂戴した方々にこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。